

令和5年2月1日

京口門だより No. 112

ひときわ厳しい寒さの寒中でしたが、立春(2月4日)といえども暖かさはまだ先のように思えます。「鳥の啼く梢は寒き二月かな」(衛美)

新型コロナ感染症も5月から厳しい対応が緩められるようですが、不安に思う気持ちもあります。何度かこの感染症に漢方薬が有効であることに触れてきました。当診療所でも直接診療はできませんが、相談を受けて高熱がでた時、咽が痛くなった場合、咳が止まらなくなった場合、味覚障害をきたした場合など当院の風邪1号、5号、11号や他の漢方薬で、随分経過が良くなった方達がおられます。

漢方医学は長い歴史をもった医療で、さまざまな病気に否が応でも対処しなければなりません。二千年ほど前に作られたという漢方医学の原典である「傷寒卒病論」は、実は当時流行した急性伝染病(腸チフスのような病気)に対処する治療書であったと言われていています。卒病とは急性疾患という意味です。その後も中国で幾度も繰り返された疫病(伝染病)ごとにいろいろな漢方薬が作られてきました。漢方医学の歴史は急性感染症に対処する医学であったともいえます。そのように経験と知恵が今日まで有用な薬を残してきました。しかも重要なことはこの病気にはこの薬といった決まりきった治療法でなく、その病気の時間による変化や症状に対して柔軟に対処することになっています。つまり病気でも個人個人によって対処法が違うということです。

感染症以外にも昔は戦争が頻繁に起こっていましたから、戦傷に対する処置や薬方が作られていました。それは今日災害医療として役に立つとも考えられています。実際12年前の東北大震災や7年前の熊本震災でも、災害医療団の人たちの中には漢方薬を使ったり、鍼治療をおこなったりしてきめ細かな医療を実践した人たちがいました。長い避難生活で感冒、扁桃炎、胃腸炎、便秘、倦怠感、不眠、苛立ちなどに漢方薬を、筋肉痛、腰痛、膝痛などには鍼治療を実践して効果的であったという報告が論文として出され、台湾地震の際にその報告が現地で役に立ったという報告がされました。災害時に医療機関が機能しないときに、漢方薬や鍼治療が役に立つというのは素晴らしいことです。

